九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

遠藤周作『海と毒薬』論 : 汎神論的感覚との接合と対立

池田, 静香
福岡共同公文書館

https://doi.org/10.15017/1456071

出版情報：九大日文. 22, pp.38-48, 2013-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

遠藤周作『海と毒薬』論

――汎神論的感覚との接合と対立――

池田（IKEDA）　静香（Shizuka）

はじめに

第二次世界大戦下、九州帝国大学医学部（当時）で行われた米国人捕虜に対する生体解剖事件を題材とした「海と毒薬」（「文学界」昭和32年6、8、10月号）は、戦争という「みんな死んでいく時代」（「海と毒薬」、『遠藤周作文学全集1』新潮社　平11年4月　110頁、127頁）のなかで、生体解剖実験に手を染めていく人々の心の揺れが、敗戦へと向かっていた当時の重々しい雰囲気を色濃く映しながら描かれている。また、発表された昭和32年は、未だ戦争の記憶も生々しい時期であった。そのため、発表当時は、事件の関係者から「『海と毒薬』という小説を読んだ時、（略）自分等の古い傷痕を抉られたような心境」（平光吾一「戦争医学の汚辱にふれて」（「文芸春秋」昭32年10月号）204頁）だったと言われ、自宅には「脅迫状が舞いこむ」（遠藤順子『夫の宿題』PHP研究所　平10年7月　81頁）こともあり、生体解剖事件を採り上げたこと自体に対する読者の拒絶反応にも直面したようだ。しかしながら、同時代評によって「その事件（略）は氏が永いこと主題として温めてきた、神が不在であるということの悲惨について書くためのダシに使われたに過ぎない」（山本健吉「小説の中の日本的風土」（「文学界」昭33年6月号）5頁）と指摘された通り、『海と毒薬』（文芸春秋新社　昭33年4月）における遠藤の目論見は、別のところにあった。むろん、現実の事件を素材とした作品が発表された時、「筆者の目論見は別のところにあった」という物言いが、直ちに関係者からの非難を回避する逃げ道となってはならないが、『海と毒薬』に関する限り、遠藤は主だった登場人物をすべて架空の人物として描いている上に、かの事件を断罪する気はなかったと、再三に亘って主張している（「出世作のころ」（「読売新聞」昭43年2月5～13日）『遠藤周作文学全集12』新潮社　平12年4月　414頁、「わが小説」（「朝日新聞」昭37年3月30日）『遠藤周作文学全集12』282頁などを参照）ことに注目したい。遠藤は、『海と毒薬』発表後の昭和40年、当時の取材日記の一部を「『海と毒薬』ノート」（「批評」昭40年春号）として発表したが、そこには「集めた事件の内容メモ（略）は（略）捨ててしまった」（「わが小説」282頁）と記されている。また、別の機会には、取材にあたっても、当事者に迷惑がかからぬよう腐心したことを打ち明けている（遠藤周作×窪田精「戦争文学と民衆の視点」（「現実と文学」昭38年7月号）20頁）。これらは、小説と事実の間に横たわる乖離を、強く主張したものであっただろう。

では、遠藤が試みたのは、事件そのものを描くことではなく、何だったのであろうか。先行論文の多くは、この作品に二つの意義を見出している。一つには「日本人における「罪意識」の不在の無気味さを追究し、結局、まことの神を知らないことが罪意識の欠如の因由ではないか」（佐古純一郎『新潮日本文学辞典』

新潮社　昭63年1月　167頁）という日本の精神風土の弱点をついたところに、そしてもう一つには、その裏返しともいえる日本人における「それ（注、罪意識の不在）を保証する神の不在意識を描きたかったのではないか」（上総英郎「遠藤周作論（二）」（『論究』昭57年10月号）、『遠藤周作論』春秋社　昭62年11月　83頁）という部分に、この作品の意義は見い出されてきた。いずれにせよ、日本人における罪意識の問題が作品のテーマであることは、遠藤自身が認めていることであるが、『海と毒薬』で試みた創作にあたっての問題を、次のように解説している。

『海と毒薬』に出した問題は、今も言われたように日本人の罪意識の不在ということですが、それを含めてやはり、『沈黙』で井上筑後守が言っているような、日本で、日本人の心性とキリスト教がどういうふうな関係と対立を示すであろうかというテーマが背後にあるのです。（遠藤周作×小川圭治×熊沢義宣×佐古純一郎「神の沈黙と人間の証言」（『福音と世界』昭41年9月号）51頁、傍線は池田。以下同）

ここで示されている背後のテーマを具体化する際、手本とされたのがフランソワ・モーリヤックの『テレーズ・デスケルー』（*Thérèse Desqueyroux*, Grasset 1927 以下『テレーズ』と記す）であった。遠藤は『テレーズ』が抱える宗教と文学の問題を、日本の風土に置き換え、その中で汎神論的感覚とキリスト教がどのような化学反応を起こすのかを炙り出そうとしたのである。この時、生体解剖事件という事象に日本の風土を代表させることが妥当であったかか否かを判断するには及ばないが、遠藤は「戦中派」が戦争へ参加する際の姿勢を踏まえて、作品の土台を創り出すことを明確に意識していた（『海と毒薬』ノート」（『批評』昭40年春号）『遠藤周作文学全集15』新潮社　平12年7月　262頁）。つまり、日本という精神風土において、「自分を押しながすものから（略）どうしても逃れられ」（『海と毒薬』131頁）ず、戸田のように「こんな時代のこんな医学部にいたから捕虜を解剖しただけ」（180頁）だとうそぶきながら、もしくは勝呂のように「もう今日から戦争も日本も、自分も、凡てがなるようになるがいい」（127頁）と無気力になりながら、生体解剖事件に手を染めていく人物たちを描くことを通して、遠藤は、かの戦争に対する反省のもとに熟慮されねばならない「日本の精神風土」の有り様とキリスト教との交わりを、その接合点と対立点の双方を意識しながら、描き出そうと努めたのだと考えられる。

『海と毒薬』は、フランス留学（昭25～28年）から帰国した遠藤が、西洋と日本の精神世界を対立させ、その違いを明瞭に描き出すことを目指した第一作品「アデンまで」（『三田文学』昭29年11月号）から芥川賞受賞作を含む『白い人・黄色い人』（講談社　昭30年11月）といった一連の「違い」を際立たせた作品群から派生した物語である（「キリスト教と日本文学」（『東京新聞』昭30年4月13～14日）『遠藤周作文庫　文学と芸術』講談社　昭52年5月　230頁、「わが小説」282頁）。日本人でありながらキリスト教徒であるという属性の矛盾に執着することで執筆テーマを掘り下げていく遠藤にとって、『海と毒薬』もまた、西洋と日本が持つ距離感の認識を深めることや、「距離感」そのものを描くことが目的の一つ

だったであろう。とはいえ、結果として多くの評者から「日本人の罪意識の不在」を描いた点に「読み」の中心を据えられてきた『海と毒薬』について、後年、次のように述べている。

モーリヤックから受けた当初の影響とは、意識下にあるものはイコール悪という感じです。たとえば『海と毒薬』（昭和33）のばあいでも、勝呂がついに戦争というもののなかに流されて生体解剖をしてしまうのは、動機もなにも外側は書いてますけれども、こういう気持だということは書いてありません。というのは、あれは『テレーズ・デスケルー』と同じ手法で書こうという気持ちがありましたから、当人にもその自分の心にある実態がよくわかっておらんわけです。その『海と毒薬』における無意識の扱い方が、生体解剖というひとつの罪に導かれるというのは、書きながら非常に苦しいことでした。これがもし神を志向するものに変われば、ということは、ずっと希望してました。だがそれがなかなか見つからないので、もがいていました。（遠藤周作×佐藤泰正『人生の同伴者』春秋社　平3年11月、引用は、新潮社文庫　平7年4月　108頁）

この発言は、『海と毒薬』を書いていた頃の遠藤が、西洋と日本という距離感を乗り越えて、日本という風土における神の根ざし方を掴みたいと願っていたことを私たちに教えてくれる。だが、右の引用にある「神を志向するもの（略）がなかなか見つからな」かったという作者の述懐の通り、結果として『海と毒薬』は「神なき人間の悲惨」を描いた作品となり（高橋たか子「遠藤周作論」（「批評」昭41年8月号）104頁）、「日本人の罪意識のなさを描いた」作品として、その評価が定着したものと認識される傾向にある（笠井秋生「『海と毒薬』――日本人的な感覚の追究」（『遠藤周作――その文学世界』国研出版　平9年12月）63頁）。しかしながら小稿は、『海と毒薬』における作家の出発点には、日本の精神風土とキリスト教の対立点を暴き出す意識のみがあったのではなく、その接合点をも掴もうと努めた願いもあったことに注目する。そして、創作にあたって手本とされた『テレーズ・デスケルー』に対する遠藤の理解が、『海と毒薬』の登場人物たちにどのように影響しているのかを検討していくことで、改めて本作で取り組まれた問題の焦点を整理し、同時に、万に一つ、勝呂が「神を志向するものに変わる」契機があるとすれば、作品で焦点化された日本の精神風土のどの部分にあると見定められていたのかを明らかにすることを眼目とする。

問題の中心
――遠藤の『テレーズ・デスケルー』理解と『海と毒薬』

遠藤は、何故、生体解剖事件を題材に作品を描いたのかという理由については、「重要な問題だから、書かねばと思っていた」（「戦争文学と民衆の視点」20頁）といった漠然とした理由しか明らかにしていないが、執筆にあたって『テレーズ』を意識していたことには、言葉を重ねている（「作家と読書」（「批評」昭33年秋号）119頁など）。設定を全く異とするモーリヤック作品を自作に置き換えるにあたって、遠藤が参考にしたのは、「運命という

か、闇の中に沈んでいく（略）テンポ」（遠藤周作×上総英郎「私と「テレーズ・デスケイルウ」」（「三田文学」昭44年8月号　8頁）であった。遠藤は『テレーズ』という小説の魅力について、「この小説の面白さの一つは何といっても心にくいほど女の男にたいする根本的な憎しみをほりさげ、その憎しみの理由がその女自身にもつかめない点にある」（「「テレーズ・デスケルウ」という女」（「婦人公論」昭38年3月号）、『遠藤周作文庫　聖書のなかの女性たち』講談社　昭50年11月　188頁）と述べている。この「テレーズ自身にも憎しみの理由」がわからないことが作品全体を包み込むテンポを創り出し、最終的に彼女をして夫に毒を飲ませる行為へと走らせるまでに至る。作品における表面上の行為と動機の連動性の無さがこのテンポを創り出すのだが、この文体は、明晰な心理小説の伝統を持つフランス人作家モーリヤックが、フロイトの精神分析学やドストエフスキーによって知らしめられた人間の矛盾した心理（無意識）を描くべく努力した結果、手に入れた描き方だと、遠藤は称える（「私と「テレーズ・デスケイルウ」」9頁）。

さて、こうした特徴を持つ『テレーズ』が遠藤にとって有用だったのは、行為に対応する動機というものを画一的に捉えることのできなくなったのが「戦後作家」に課された難題だと認識していたからであり、闇に沈んでいく登場人物たちの明確な動機を書こうにも、戦争によって人間の複雑な心を知ったいま「その動機を掴むことが出来ない」という気持ちを、強く持っていたからである（『作家の日記』作品社　昭55年9月、『遠藤周作文学全集15』63～64頁）。その実、遠藤は、戸田や勝呂が実験に参加する動機を、次のように説明している。

この小説は次のようなものでなければならない。／（略）彼はその罪にたいして、全く形而下的なものによって犯さなければならない。それはコメディである。たとえば〈腹が痛かった〉〈家に帰るのがイヤだった〉という理由で彼は罪に参加せねばならない。（戦中派とはそういうものだ）／（略）「AもBもCも……Xの理由でいつの間にか巻きこまれたのである。罪というのではない。しかし罪である。なぜならこの虚無感がある。（『海と毒薬』ノート」262頁）

遠藤は「戦中派」の特徴を、明確な理由があるわけでもなく何かに巻きこまれるように生体解剖実験（罪）に参加するという心性に見出していた。この動機と行為の不連続性が、作中、勝呂へと受け継がれていく。このことを、遠藤の『テレーズ』解釈に則して述べれば、勝呂の心性は、「悪意があったためでもない、目的があったためでもない。ただ、けだるかったから」砒素療法の薬を処方されている夫に、その日の服薬の有無を教えなかったテレーズの心性（「私の愛した小説」（原題「宗教と文学の谷間で」（「新潮」昭58年10月号～昭59年11月号）引用は、『遠藤周作文学全集14』新潮社　平12年6月）13頁）に通底しているということになるだろう。従って、『海と毒薬』の視点人物のなかで、『テレーズ』と最も似通った行為と動機の関係性を示すのは、勝呂の場合ということになる。なぜなら、遠藤は単行本化にあたって、特に第三章に多くの手を加え、上田ノブの実験への参加動機を

「聖女・ヒルダへの嫉妬によるもの」だ（「海と毒薬」179頁）とより明確にした。構想日記（『海と毒薬』ノート）には、彼女の造形を「テレーズ・デスケルウのごとく額が広い」女性で、ノブが敵対心を抱くヒルダ（マリア）に対する「（エバ）として」（262頁）の役割を持つ女にしたいと記されており、ノブは「悪の意志にひきこまれる（略）誘惑の女」（262頁）という役割を背負わされている。また戸田の場合も、動機はある程度明確だ。彼は、幼少期から「他人の眼や社会の罰だけにしか恐れを感ぜず、それが除かれれば恐れも消える自分が不気味」で「ふしぎ」（「海と毒薬」156頁）であった。これまでの「醜悪」な行為の数々を通して知った、こうした自分の性質が覆され、良心の苛責が襲ってくることを確かめてみたいから承諾したのである（157頁）。

以上のように、生体解剖実験への参加の動機が明らかにされる上田ノブ・戸田に対し、勝呂の動機は曖昧とされたままでストーリーが進む。従って、『テレーズ』における文体（行為と動機の不連続性）を特に意識して展開が構想されたのは、勝呂の場合だと推察される。そこで小稿では、勝呂を通じて、遠藤が生体解剖実験への参加のあり方とキリスト教の精神とを、どのように関わらせて作品を創り上げようとしたのかを考察する。その基盤を整えるために、西洋の小説が孕む問題を日本の風土へと置き換えるにあたり、遠藤が、二つの精神風土のどこに焦点を絞ってその相違点と接続点とを対応させようとしていたのかを整理する。堀辰雄、三島由紀夫、中村光夫といった先輩作家によって愛された『テレーズ』は、遠藤自身がこの点を熟考するにあたっても、良い参照点となったようだ。

『テレーズ・デスケルー』を日本の風土に置き換える
――遠藤周作による『菜穂子』読解を通して

「西洋と日本」の問題に拘り続けた遠藤にとって、西洋文学に造詣の深かった堀辰雄が、『テレーズ』をどのように受容しているかを分析することは、とりもなおさず、自身の問題をより一層深化させるものだった。そのため、『テレーズ』を日本の問題に置き換えようとする時に横たわる難所を、戦時下にあった若き日に軽井沢まで赴いて私淑した堀辰雄の『菜穂子』（創元社　昭16年11月）を読み込むことで、把握していく（堀辰雄覚書　実存の悲劇」（「高原」昭23年7月号）、『私の愛した小説』など）。フランス留学前の評論『堀辰雄覚書』（一古堂書店　昭30年11月、初出は「高原」昭23年3、7、10月号）には、次のような注釈がある。

> 『菜穂子』を小説的にモーリヤックの影響の下にここでは考えない。然しモーリヤックは堀氏によって非常の屈折を以て受け入れられている事だけは一言したい。（「堀辰雄覚書」、『遠藤周作文学全集10』新潮社　平12年2月　20頁）

文学と対峙した時の中心的課題を見出しつつあったこの時期、既に、モーリヤックと堀の違いを感じ取っていたことがわかる。また、小説家となる前に発表したこの論評で、「屈折を以て受け入れられている」と記した『菜穂子』について、遠藤は、晩年のエッセイ『私の愛した小説』において、その屈折のあり方を詳細に分析し、『テレーズ』を下敷きにした『菜穂子』は、

日本人作家・堀辰雄によって、いつの間にか「諦念の姿勢」ばかりを見せる「世捨て人物語の系列に入る作品」にされていると結論づけた（96頁）。その理由は次のように解説されている。

「テレーズ・デスケルー」の前半の構成は彼女が夫に自分の心の底を語るために、過去を反芻するという形になっている。言いかえると彼女は夫ベルナールを愛しているのだ。少なくともベルナールに常にこだわっているのだ。（略）ベルナールと自分との関係の修復という願いがテレーズに過去をもう一度、噛みしめさすのである。／（略）しかし菜穂子が夫を愛しつづけ、夫と自分との関係を修復することにこだわっているとは思われない。療養所に夫が見舞いに来た時も、菜穂子は彼への愛を渇望する妻としての感情をほとんど見せないのに注意されたい。（略）ここに「テレーズ・デスケルー」と「菜穂子」との本質的な隔たりがある。テレーズは夫に毒を飲ませたが、それは夫との本当の結びつきを渇望したためだった。だからこの作品には他者との関係があった。しかし「菜穂子」にははじめから夫への諦めしかないから、この作品は他者との関係ではなく、菜穂子が本当の自分の在りかたを見つけようとする作品なのである。（「私の愛した小説」95頁）

菜穂子が見せる夫への諦め一辺倒の生き方、遠藤はそれを実に日本的な感性の表れであるという。更に、日本人作家が自分の日本的無意識に忠実に描いたからこそ滲み出てしまった菜穂子の諦念の姿勢をもって、遠藤は「テレーズ日にあらたなり、菜穂子今日読むに価わず」とまで書きつける（96頁）。こうした無意識のうちに日本的感覚が滲み出てしまう事態について、遠藤は、モーリヤックと川端の作品を対比し、その超えがたい違いを訴えもする（「作家と読書」120頁）。それほど、遠藤にとっては、敏感にならざるを得ない変化だったのだろう。

遠藤は、『テレーズ』を下敷きとしながらも似て非なる小説となったのが『菜穂子』だと分析するが、その違いをテレーズの側から指摘すれば、その根拠は彼女の根底にある「他者との関係」にある。『テレーズ』にだけあるこの部分に潜んでいるのが、キリスト教文学における「宗教と文学」の問題だ。前節で確認した通り、遠藤は小説としてのテレーズの魅力を、「夫への憎しみの理由が彼女自身にもわからない」という部分にみていた。小説としての面白さでもあるこの部分は、作中、テレーズが夫に毒を飲ませるに至る過程について、動機が明確にされることはなく、映画的描写法を用いて、外側だけを描く構成を作品に強い（「私と「テレーズ・デスケイルウ」9～10頁）、テレーズを「点の上に凝固して動かぬ」受動的な性分の持ち主として描くことにもなる（「テレーズの影をおって」（「三田文学」昭27年1月号）『遠藤周作文学全集12』新潮社　平12年4月　149頁）。「寝そべる快楽」と称されるテレーズのこの傾向は、一見、菜穂子の諦念の姿勢と同様に捉えられがちだが、遠藤は、それは作品全体を通してある傾向ではなく、夫から見捨てられて初めてテレーズに表れた性質だと読解する（「私の愛した小説」112～113頁）。更には、『テレーズ』の前半にある夫との関係の修復を求める願いは、

聖書を原点とするキリスト教文学に伝統的に使用されてきた「置き換え手法」が意識された「再生への願望」だという（「私の愛した小説」44頁）。ここまで直接的に、『テレーズ』と『菜穂子』が比較されるのは、『海と毒薬』の約30年後に書かれた『私の愛した小説』の発表を待つ他ないが、先に引用した通り、評論家を目指していた頃に発表した『堀辰雄覚書』で、既に両作品の違いを指摘していたことや、同書において堀文学の特徴を『私の愛した小説』と同じく「諦念の姿勢」に見ていた（35～36頁）ことを踏まえれば、小稿における整理の基準としようとしている発言が、『海と毒薬』の執筆から長い歳月を経た時点の作品『私の愛した小説』のものであったとしても、あながち的外れとはならないだろう。そこで、『菜穂子』と向き合うことで掴んでいたであろう『テレーズ』を手引きとして執筆する際の注意点、つまり汎神論的感覚におけるキリスト教信仰との接合点を探究する際のポイントは、短絡的な諦めによって、勝呂が生体解剖実験に参加する小説となってはならぬという部分にあったと推察する。

『海と毒薬』における日本人の心性とキリスト教の関係
――勝呂の場合を考える

神のいない国である日本を舞台とした『海と毒薬』において、高橋たか子は、遠藤が「人間を見つめる眼（略）というものでキリストを象徴しようと」（「遠藤周作論」105頁）していることを評価した。だが、キリスト教信仰を有する作家が評価したこうしたキリスト教の日本への還元は、インテリの象徴である戸田がいう「世間の罰だけじゃ、なにも変わらん」（「海と毒薬」180頁）という日本人の良心の土台となる可能性を有するはずの「世間＝他人の眼」の脆さをついた理屈に呑み込まれながら作品がクライマックスを迎えるため、無条件には日本化したキリスト教としては受けとめられず、「日本人の罪意識のなさを描いた」作品として認識される傾向ばかりが強く残されてきた（笠井秋生「『海と毒薬』――日本人的な感覚の追究」63頁）。だが、『菜穂子』を鏡としながら、遠藤が『テレーズ』的物語を日本の風土に置き換えた場合にみられるキリスト教感覚の全き日本化の危険さを認識していたことを考慮すれば、『海と毒薬』で苦心された事柄とは、勝呂がみせる実験参加への戸惑いや躊躇いの把握にあっただろう。参加を打診される場面は、勝呂にとって「初めての患者」であったおばはんが死んで、「もう今日から戦争も日本も、自分も、凡てがなるようになるがいい」（「海と毒薬」127頁）と投げやりになった後に、訪れる。

俺は何故、この解剖にたちあうことを言いふくめられたのだろうと勝呂は眼がさめた時、考える。言いふくめられたというのは間違いだ。たしかにあの午後、柴田助教授（アスプロ）の部屋で断ろうと思えば俺は断れたのだ。それを黙って承諾してしまったのは戸田に引きずられたためだろうか。それともあの日の頭痛と吐き気のためだろうか。炭火が青白く燃え、戸田の吸う煙草の臭いのために頭はぼんやりとしていた。（略）／どうでもいい。俺が解剖を引きうけたのはあの

青白い炭火のためかもしれない。戸田の煙草のためかもしれない、あれでもそれでも、どうでもいいことだ、考えぬこと。眠ること。考えても仕方のないこと。俺一人ではどうにもならぬ世の中なのだ。（「海と毒薬」129頁）

勝呂は、自分が拒まなかった理由が分からないばかりか、その理由を考える気力さえない。それは、「疲れていたという以外」説明のつかない「木の根のように絡みあつたテレーズの複雑な気持」（「作家と読書」119頁）と同様の感情として、作者に認識されていた。だが、実験後の勝呂は、捕虜を殺したことに対して戸田が提示する多方面からの理窟にも、「お前（注、戸田）は強いなあ」（「海と毒薬」180頁）と自身との違いを認識するばかりで心の底から納得することができずにいる。とすれば勝呂には、生体解剖実験に参加したことに対し、戸田が内なる良心の声を求めたような明確な動機はないにしても、遠藤がいうところの菜穂子ほど一面的な諦めだけがあるわけでもないだろう。

加えて、戸田が指摘するように、おばはんは勝呂にとって「一種、（略）神みないな」（131頁）ものだったが、神のいない国において見出された唯一の「神」らしきものを失いながらも、作中、勝呂が誰よりも他人の眼を意識していることには、留意せねばなるまい。小心者故に、実際には何もすることの出来なかった実験終了後、勝呂は烈しい嘔き気と「自分の人生をメチャにしてしもうた」（171～172頁）という後悔の念に苛まれる。そして密室で行われた行為を、看護婦や患者の誰一人、知っているはずもないのに、心の中で「もう研究室をやめよう」（171頁）、なにも知らない「この患者たちを見ることはできん」と、決心する（175頁）。自らの置かれた状況を見極め、巧みに立ち回ることが出来るからこそ強がる戸田にも、「（略）俺あ……今日、手術室で眼をつむっておった。どう考えてよいんか、俺にはさっぱり今でも、わからん」（180頁）と素直に嘆く。勝呂を襲う「烈しい嘔き気」に彼の日本的罪意識を読みとる先行研究には、上総論、笠井論（どちらも前掲）があるが、改めて本文を確認することで気づかされるのは、他人の眼さえなければどんな罪をも犯してしまう日本の精神風土（恥の文化）を暴いたといわれる『海と毒薬』（西村幸雄『愛と信頼を求めて』ヨルダン社　昭44年4月　90～91頁）だが、勝呂の場合を見る限り、彼はその文化とのせめぎ合いのなかで懊悩していることだ。昭和23年、社会思想研究会出版部から初めての邦訳が出版されたルース・ベネディクトの『菊と刀』（*The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*, Houghton Mifflin 1946）によって広められた「恥の文化」を、勝呂がただ緩慢と生きる青年であれば、生体解剖実験のことを何も知らない看護婦や患者を前に、研究室を去る必然性は無かった。だが作中、世間の眼を逃れた状況下においても、勝呂は「でも俺たち、いつか罰をうけるやろ」（180頁）と怯える。この怖さこそが、東洋的因果応報の真理であり、そこに、『海と毒薬』が見出したキリスト教と汎神論的感覚との接合点がある。

戸田が求めたもう一つの響き

勝呂を通して、『沈黙』（新潮社　昭41年3月）以後の作品群と同

じく、『海と毒薬』でも日本という汎神論の世界においてなお機能するキリスト教の鍵穴が模索されたのだという側面に注視する時、戸田の場合においても同様に、西洋と日本の「違い」だけでは把握しきれない感情が描かれていることに気づく。

プロテスタントのキリスト者である北森嘉蔵は、日本人の良心が「不気味さ」という感覚的な部分にかろうじて触れあっているところに、『海と毒薬』における一縷の望みを見る（山本和×北森嘉蔵×国谷純一郎×小川圭治「遠藤周作『海と毒薬』をめぐって―第一回書評会―」（「兄弟」昭和35年4月号）18頁）が、戸田は、幼少期から「他人の眼や社会の罰だけにしか恐れを感ぜず、それが除かれれば恐れも消える自分が不気味」（156頁）であった。生体解剖実験への参加を打診された時、これまでの「醜悪」な行為の数々を通して知った自分の性質が覆され、良心の苛責が襲ってくることを確かめたいと願い、承諾する（157頁）。だが結果として、戸田の胸をしめつけるのは、「堕ちる所まで堕ちたという気持だけ」だ（175頁）。こうした側面を『菜穂子』との比較から認識するならば、菜穂子が自分の置かれた状況を従順に受け入れ、「彼（注、夫）への愛を渇望する妻としての感情をほとんど見せ」ず、「夫と自分との関係を修復することにこだわっているとは思われない」（「私の愛した小説」95頁）態度を示すのに対し、少なくとも戸田は、テレーズが現実には破滅的な行動をとりながらも本当は再生を願っていたのと同じく、「他人の苦しみに無感動」（「海と毒薬」156頁）な自分に良心の苛責が沸き起こることを望んだ（174頁）といえる。つまり、欠落したと自認する良心（罪意識）の渇望こそが、戸田が実験に参加した原動力として描かれる。作中にもあるように、当時、無差別爆撃を行った捕虜は銃殺される定めであった（129頁、捕虜の虐待を禁じたジュネーブ条約に戦時下の日本は不参加）。小賢しいほどに要領が良く機転が利く戸田にとって、個人の利益より集団の利益が優先される戦時下において、銃殺される運命の捕虜を生体解剖したところで、「あの捕虜のおかげで何千人の結核患者の治療法がわかるとすれば、あれは殺したんやないぜ。生かしたんや」（180頁）と正当化することは簡単だったろうし、西部軍の命令による実験実行であれば、戸田をして「こんな時代のこんな医学部にいたから捕虜を解剖しただけや。」（180頁）と自身の責任を回避する逃げ道は、容易に導かれたであろう。しかしながら、戸田はそう易々とは安楽の地へと歩を進めない。彼は、苦しみ藻掻きながら、社会の罰などには左右されない心の内奥に埋もれているであろう良心を渇望した（157頁、174～175頁）。それは、「他人の苦しみに無感動」（156頁）な自分を変えたいという真摯で積極的な取り組みであろう。闇に沈んだまま浮かび上がってくることのできなかったテレーズ。そこに救いは描かれておらずとも、神を渇望し続けた部分に遠藤は『テレーズ』の真価をみた（「私の愛した小説」94～95頁、但し、福田耕介「翻訳者としての遠藤周作――『テレーズ・デスケルー』訳をめぐって」（「言語・文学研究論集」平16年4月号）によれば、「もし、遠藤訳で初めて『テレーズ・デスケルー』を読む読者がいたとすれば、その読者は予めテレーズの孤独の中に「キリスト」を見出すように意識操作を受け（略）「神の怖ろしいまでの不在」をうたわれるこの作品の

印象を予め歪めてしまう」（28頁）危険性があるとのこと）。とすれば、生体解剖実験に参加する自分を、状況的要因から納得させることは容易でありながらも、内なる抵抗をみせた戸田には、少なくとも「諦め」に至るまでの苦しい葛藤が入念に描かれているといえる。更には、彼が求めた「心の苛責」は、時代によって変化する世間の罰とは一線を画するものとして設定されていた（157頁）。戸田は、世間や社会の罰に対してだけ恐れを抱く日本人の感性（恥の文化）とは別の何かを求め続けたのである。そこに、勝呂の場合と同じく、日本人の心性とキリスト教とのかかわりを模索した痕跡が刻まれている。

終わりに

初期評論集『カトリック作家の問題』（早川書房　昭29年7月）において、遠藤は「われわれ（注、日本人）が無神論者である事は、おおむね「神があろうが、なかろうが、どうでもいい」と言う事」（『遠藤周作文学全集12』新潮社　平12年4月　19頁）だという認識を示していた。『海と毒薬』においても、勝呂は「俺にはもう神があっても、なくてもどうでもいいんや」（131頁）と呟く。これらは、西洋との違いを端的に捉えた日本の精神風土に対する言葉である。しかしながら、それと同時に、遠藤が「（注、戸田や勝呂の無意識が）神を志向するものに変われば」（『人生の同伴者』108頁）と試行錯誤していたことや、『菜穂子』読解を通じて感じていた西洋文学を日本の風土に置き換えた時の違和感を踏まえたならば、『海と毒薬』において遠藤が取り組んだ課題とは、『テレーズ』が抱えるキリスト教的課題を、自作のなかにいかように残し、またその残された課題を、どのように日本の精神風土のなかで自律的なものとして描くのかという点にあったろう。

この点について、小稿では、遠藤が反面教師とした堀辰雄の『菜穂子』を、『テレーズ』の反対側にある典型的作品として措定し、比較検討することで、『海と毒薬』における解釈の基準を導き出そうと努めた。その結果、『海と毒薬』における作品構成の成功の基準は、テレーズが有する他者（夫・神）との関係を再生しようとする欲求が、日本の精神風土に置き換えるうちに骨抜きにされ、世捨て人物語に変化させられていないかどうかという点にあるものとして設定することが可能となった。この点に留意して『海と毒薬』本文を読み返す時、これまで、多くの評者によって指摘されてきた『海と毒薬』に描き込まれた「世間の罰」や「恥の文化」という日本の精神風土によって生じる「罪意識のなさ」は、それを暴くため、もしくは西洋との違いを認識するためにあるのではなく、キリスト教文学が促す主人公の「再生への願い」と同様に、『海と毒薬』の登場人物たちが日本の精神風土と格闘し、「恥の文化」を乗り越えるべく苦悩するなかで描かれていることが伝わってくるものとなった。また、このせめぎ合いを考察することで浮かび上がる勝呂や戸田が抱える苦悩は複雑なもので、日本人でありながら、日本の一般的な罪の意識（世間の罰）とは次元を異にする新たな「良心」を望むものとして設定されていることが確認された。

聖書における象徴的記述方法である「置き換え手法」によって示される再生への願い。『テレーズ』の前半部分にあるその手法に『海と毒薬』も倣い、日本の伝統的な罪の意識（世間の罰）とは次元を異にする新たな「良心」の出現が望まれた。だが、結果として『海と毒薬』の二人に、明らかな再生や救いがもたらされるまでには至らなかった。だからこそ、『海と毒薬』以降、西洋と日本の距離感を乗り越える光景を描くことを、遠藤はより一層目指した。その意識の変化は、次のように記録されている。

『海と毒薬』以後私の気持の中に大分変化があった。その変化というのは、（略）罪意識が不在であるとかないとかいう形では、自分はすまされないのだ、だからこれから自分はどういうふうにそこからして行くべきかというテーマを小説で書いていきたい、日本人には罪意識がないから、これに対立してどうしてもむずかしいというのではなくて、ないのではなくてあるという方向に持って行くためには、どういうふうにして行かなくてはならないかという方向がひとつ。（「神の沈黙と人間の証言」51頁）

「罪意識が（略）ないのではなくてあるという方向に持って行く」気持ちが強くなったのが『海と毒薬』以後だと発言しているとはいえ、同じ座談会の直前には、『海と毒薬』には「日本で、日本人の心性とキリスト教がどういうふうな関係と対立を示すであろうかというテーマが背後にある」（「神の沈黙と人間の証言」51頁）と述べ、また後年には、勝呂と戸田の救いを願っていた（『人生の同伴者』108頁）ことを打ち明けている。とすれば、救いには至らずとも、登場人物たちの罪（生体解剖実験）に対する能動的な働きかけが、「置き換え手法」を利用しているからこそ『海と毒薬』に描かれている部分は、遠藤文学の流れを把握する上で、もっと強調されてもよいだろう。なぜなら、『海と毒薬』（文芸春秋新社　昭33年4月）以後、遠藤は『沈黙』（新潮社　昭41年3月）において母性的キリスト像の萌芽を打ち出し、その後は遠藤文学の神髄となる同伴者イエス像を確立した『侍』（新潮社　昭55年4月）を発表するなど、立て続けに日本的なキリスト教の相貌を我がものとしていくが、この時、参考にされたのが、やはり聖書や西洋のカトリック文学から学んだ「置き換え手法」であった（「私の愛した小説」45頁、47～48頁）からである。むろん『海と毒薬』以降の遠藤には、執筆に対する姿勢に大きな変化があったようなので、『海と毒薬』とそれ以降の作品を安易に同列に扱うことは難しく、整理されなければならない点が多く残されているが、同じ手法を採り入れながら、日本的なキリスト教の有り様を見出せた作品とそれが叶わなかった作品があるとすれば、その違いは何処にあるのだろうか。いずれ稿を改めて、考察の機会を持ちたい。

（福岡共同公文書館）